

「実習生と実習指導者が 共に育ちあう保育実習」に向けて

～保育所・認定こども園等での保育実習～



はじめに

少子化に歯止めがかからない状況が続き、2021（令和3）年の出生数は、前年より2万9,213人減少し、過去最低の81万1,622人、また、合計特殊出生率も、前年の1.33から1.30へと低下しました。さらに、2023年2月、2022（令和4）年の出生数は79万9,728人と過去最少を更新したことが発表されました。こうした少子高齢化社会の中で、乳幼児期の保育の質が、その後の人生に大きく影響することを認識し、保育所等就学前の保育の質の向上、そして、実践力や応用力をもった専門性の高い保育者の育成が求められています。

さて、保育士資格を取得するために、保育所等での実習は必須のものであり、保育士養成課程の「核」と位置づけられ、「保育現場と保育士養成校とが協働する保育実習」への取り組みがなされています。

学生にとっては、保育士養成校で学んだ基礎的理論と技術を統合し、理論と実践の往還を可能にする学びの機会となり、保育士等としての基本理解と実践力を身につけていきます。一方、保育現場の実習指導者は、実習生とのかかわりを通して、自らの保育を見つめ、自身の専門性の向上・保育の質の向上が図られ、園の保育の質の向上に、さらに、養成校の教員は保育所等の理解を深め、養成校における実習指導はじめ教科目での指導の改善に生かすことに繋がるのです。

実習生・実習指導者・保育士養成校教員が共に育ち合う実習指導のポイントを提示した本誌を、「負担感の強い保育実習指導から、協働する保育実習指導へ」の取り組みに活用していただくことを願っています。

目次

はじめに

I 実習指導のポイント

- 1) 事前指導（オリエンテーション）・・・・・・・・・・ 1
- 2) 実習期間中の指導・・・・・・・・・・ 4
- 3) 実習の振り返り、評価・・・・・・・・・・ 10

II 実習事例から保育指導の方法を学ぶ

- 1) 実習を通して実習生が変容した事例・・・・・・・・・・ 11
- 2) 日誌に実習生の成長がうかがえる事例・・・・・・・・・・ 13
- 3) 子どもの気持ちに寄り添いながら実習生が育つ事例・・・・・・・・・・ 14

III 実習生を受け入れて～実習指導者・園のメリット～・・・・・・・・ 16

おわりに

※本冊子に提示した事例は、一つの例示です。各実習園の状況に応じて実施しましょう。

I 実習指導のポイント

1) 事前指導（オリエンテーション）

オリエンテーションは、実習前に実習生が園を訪問し、実習する園について理解し、実習内容や方法、実習に向けてどのような準備をするのかなどを、確認することを目的としています。緊張し、「上手くできるだろうか」など不安な気持ちで訪れる実習生に、安心できるよう声かけをし、緊張をほぐし、実習への取り組みが楽しみになるよう配慮しましょう。

【オリエンテーションの内容】

○ 園の紹介

園の沿革、保育理念・方針、保育の内容・方法、保育環境、園の概要(子どもの数、クラス編成、職員構成)、全体的な計画、指導計画(長期・短期・ディリープログラム)等を紹介しましょう。

○ 実習計画

- ・実習生が考えてきている実習課題、どのようなことを学びたいかを確認しましょう。
- ・実習記録(書式等)や養成校での事前の学びについて確認し、子どもの名前の記載についての配慮など、実習記録に関する注意を具体的に説明しましょう。
- ・実習計画では、実習期間中の(ア)クラス配属、(イ)勤務日程(基本的な実習時間・長時間保育への参加等)、(ウ)保育・行事の予定、(エ)指導実習(部分・責任実習)の内容・日程・指導案の書き方等を、実習生の思いを尊重しながら確認しましょう。
特にクラス配属は重要です。配属クラスにより学びの体験は異なります。実習生の希望を聞きながら、園の状況に応じ、配属クラスを決定するようにしましょう。

図表 クラス配属パターン(例示)

〈パターン①〉全てのクラス(年齢)で実施の例											
5歳児	5歳児	4歳児	4歳児	3歳児	3.4.5歳合同	2歳児	2歳児	1歳児	1歳児	0歳児	0歳児
0歳児	0歳児	1歳児	1歳児	2歳児	0.1.2歳合同	3歳児	3歳児	4歳児	4歳児	5歳児	3.4.5歳合同
0歳児	0歳児	1歳児	1歳児	2歳児	0.1.2歳合同	3.4.5歳児 異年齢クラス					
1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目	7日目	8日目	9日目	10日目	11日目	12日目
〈パターン②〉一部固定クラスで継続的に実施の例											
0歳児	1歳児	3歳児	4歳児	5歳児	3.4.5歳合同	希望クラス 例: 2歳児					
0歳児	2歳児	3歳児	3歳児	4歳児	3.4.5歳合同	希望クラス 例: 1歳児		希望クラス 例: 5歳児			
1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目	7日目	8日目	9日目	10日目	11日目	12日目
〈パターン③〉固定クラス(年齢)で継続的に実施の例											
希望クラス 例: 1歳児						希望クラス 例: 4歳児					
希望クラス 例: 3歳児											
1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目	7日目	8日目	9日目	10日目	11日目	12日目

参照：増田まゆみ・小櫃智子編著『保育園・認定こども園のための保育実習指導ガイドブック』P 36、中央法規、2018年

○ 園の見学

園内を案内しましょう。

園について理解を深める大切な機会です。保育の状況(子どもたちや保育者)や雰囲気、特に、実習生が入るクラスの様子、園の保育環境を知ることによって事前準備に役立ちます。

可能であれば、短時間、保育を体験する機会を作るのも良いでしょう。

ある園でのエピソード～実習生に笑顔が…

オリエンテーションでは、できるだけ緊張をほぐせるような言葉がけをしていますが、実習初日から緊張を隠せない実習生のYさん。年長児が興味をもって声をかけると初めて笑顔を見せ、子どものおしゃべりが始まりました。それを見かけた主任保育士が「笑顔がとても可愛いね。」と声をかけると少しずつ緊張がほぐれてきました。保育者からの声掛けを増やし、たわいないおしゃべりをしていくうちに、実習生からも話しかけてくることが増えました。保育のことだけでなく、「日常会話の中にこそ、保育のヒントがあるのよ。」と促しました。

実習生と保育者がお互いのことを少しずつ理解しあってくると、子どもとの関係も円滑になり、笑顔が増え、実習を楽しむ余裕も出てきました。

○ 実習生へのアドバイス

- ◆生活リズムを整え、健康管理に努めましょう。
- ◆挨拶を積極的にしましょう。
- ◆実習課題、経験したいこと・学びたいこと等を積極的に伝えましょう。

○ こんな工夫、あんな工夫

- ◆日々の業務で大変な状況の中、実習生を受け入れるためには、保育者等が互いに声をかけ合うなど、一人の負担にならないようにしていきましょう。
- ◆「オリエンテーションガイド」の作成も一つの効果的な方法です。ガイドを作ることで、どの職員がオリエンテーションを行っても同じようにできます。また、ガイドを見ながらの説明は、実習生にもより分かりやすく伝わります。



ある園のオリエンテーションガイドより

実習生オリエンテーションガイド

～ようこそ、〇〇保育園へ!～

<定員> 〇〇名

<働いている人の職種>

1 園長、2 副園長、3 主任保育士（主幹保育教諭）、4保育士（保育教諭）等

<〇〇園の理念>・〇〇〇～、・〇〇〇～、・〇〇〇～

<〇〇園の特徴>・〇〇〇～、・〇〇〇～、・〇〇〇～

<保育時間> 〇:〇〇～〇:〇〇

<給食>

(実習生へのメッセージ)

実習生は「失敗」して当たり前。学びに来ているのですから。子どものケガや危険につながるようなことでなければ、反省して次に生かすことが大切です。また、疑問や知りたいことがあったら、できるだけ早く保育者等に聞きましょう。わからないことを聞くのは恥ずかしいことはありません。わからないことは確認して、早く解決して次に進みましょう。明るく元気に、実習を楽しんでください。

<実習中の勤務時間> 〇:〇〇～〇:〇〇

<持ち物> 上履き・外履き（運動靴）・保育着～

<注意事項>

<オリエンテーションを終えて>

- ◆ 一番楽しかったことは?うれしかったことは?
- ◆ 印象に残ったことは?
- ◆ 反省点は?
- ◆ 保育の現場に出たら何をしたいですか?

Memo



- ◆オリエンテーション後、1日～3日程度の体験実習をする機会を提供することも、実習の効果を高めることにつながります。

2) 実習期間中の指導

(1) 観察～子ども・保育の状況～

観察による学びは重要です。実習期間の初期・中期・後期の段階に応じて、観察する視点をアドバイスしましょう。

職員の協働体制、1日の保育の流れ、子どもたちのグループ構成等をあらかじめ理解していると、観察の際に注意を向ける視点を意識しやすくなります。

(2) 子どもとのかかわり

多くの実習生は、「子どもに受け入れてもらえるだろうか」、「子どもとどのようにかかわればいいのか」等、緊張と不安を抱えています。

子どもとのかかわりについて、アドバイスしましょう。

- ・子どもと一緒に生活する楽しさを感じ、また、子どもの生活がどのように展開していくのかを理解したうえで、子どもとさまざまな場面でかかわること。
- ・子ども一人ひとりの成長・発達、園やクラスの状況に合わせて、どのように見守り、かかわるのかを保育者に確認すること。
- ・子どもの行動だけでなく、子どもの発する言葉や思いを理解して、子どもとかがわることが重要であること。

保育者と実習生とが同僚性をもって、子どもと向き合い、かかわることが大切です。

ある園でのエピソード ～ 絵本の読み聞かせにチャレンジ～

初めての实習は、緊張と不安がいっぱいでした。配属の1歳児保育室に入り、角に座っていると、その姿を見つけた子どもたちが自分の膝の上にちょこんと座ってくれました。膝に座ったまま、絵本の読み聞かせにチャレンジしてみました。絵に合わせて少し抑揚をつけて擬音を出すと、キャーキャー言って盛り上がり、何度もせがまれました。子どもたちの心地いい感触が忘れられません。

(3) 実習記録

① 実習記録の留意点

実習日誌は、記録することにより実習生の振り返りによる考察が深まり、また、実習生自らの今後の課題に気づく機会となります。

子どもとの出会いや遊び、子どもの声に耳をかたむけ、子どもたちがどのように遊び、変化していくかを記録することが基本です。その際、保育者の子どもへのかかわり（声かけや行動）と関連付けて記録しましょう。

② 多様な記録

- ・時系列に沿いながら子どもや保育者の姿、実習生の行動や思いを記述。
- ・1日の印象的な場面を抽出して記述するエピソード記録。
- ・写真等を活用したドキュメンテーションによる記録。

～ドキュメンテーションによる実習日誌の紹介～

◎A園（認定こども園） 保育実習Ⅰ 5月23日 5歳児クラス（一部掲載）

妖怪・髪切りを作りたい!



妖怪・髪切り ①



妖怪の本をじっくり読み込み、Kくんは髪切りを作ることに決めました。



髪切りのように全身黒く塗りたくるKくん

太くて強そうなお尻は牛乳パックで作ることにしました。

さあ! 次はいよいよ頭のハサミ作り!



「お、先生! 段ボールさかしのケテウ!」とKくん。見つけて、帰って保育室に戻ります。早く完成させてほしいもんね!

今日はここまで!

明日は目と口を作ります!

明日の楽しみができたね♡

一日の振り返り（考察・反省）

今日は昨日の反省会でいただいたご助言を参考に、ひとりの子どもに焦点を当て、どのように遊びが展開していくかを、私も一緒に遊びながら捉えていこうと考え実習を行いました。

昨日までの2日間の実習では、子どもたちが「やりたい。」と思いながら遊びを深めていけるようなかかわりができていなかったと反省したため、今日は「そうだね。」「素敵だね。」といった相槌や子どもの遊びを認める言葉かけのみならず、「〇〇にしてみたらおもしろいかもね。」「△△を作るにはどうしたらいいかな。」などの言葉もかけてみることにしました。すると、子どもたちからとっても魅力的な発想がたくさん聞かれ、驚きました。

年長クラスということで、自分のことを自分でやろうとする意欲を育むためにも大人が介入し過ぎることは適切ではないだろうと考えておりましたが、遊びに関してはその限りではなく、子どもの意欲、喜びにつながってくるのだろうと感じました。

また、「5歳児だから」と固定的な見方をしてしまっていたことに気づき、反省しました。決めつけた見方をするのではなく、“目の前の子ども”としっかり向き合っただけでかかわります。

指導保育教諭の講評・助言等

今のけやき組の子どもたちは遊びの中で「やりたい!」に出会った時に「やって!」だった所から、「どうやったらできるかな?」と考え、実行するようになってきました。その中で、こちらの思いだけでなく、もちろん How to ~を一緒に考え、子どもの「これはどうだろう?」を一緒に試していくことを大切にしています。子どもたちの“今”を大切に、また“今”を探りながら遊びのおもしろいポイントを見つけていきたいですね!

～ドキュメンテーションによる実習日誌の紹介～（次の日）



一日の振り返り（考察・反省）

頭では考えているつもりでも、実際にやってみると子どもの姿や反応について十分に考えが及んでいなかったことに気付かされました。今回は子どもを待たせてしまうことに対して、申し訳なく思う気持ちが強すぎたため、「早く全員集めない」という思いに駆られ、肝心の待っている子どもの姿を見失っていたのではないかと感じます。実習指導者にもご指摘いただいたが、今日のけやき組の子どもたちにとって、待つことはものすごく苦しいこと、という訳ではなく、借りた絵本を読んで待っているなどしていました。また、子どもを保育室に集めることに必死で、着替えをしている子どもへ気を配れていなかったと反省しました。クラス全体を見ながらも、一人ひとりの子どもが必要としているかかわりは何か、ということをしっかり考えなければならないと感じました。

反省の多い**部分実習**でしたが、一つとても嬉しいことがありました。退勤の際、遊んでいたYくんが、「今日のおばけ、超おもしろかった。」と伝えてくれました。

子どもたちがおもしろいと思えるような活動をするのができたのかと思うと、ホッとしました。だからこそ、いかなる時でも適なかかわりをしてはいけないのだと改めて実感し、身の引き締まる思いがしました。今回の反省を活かし、**責任実習**について再度考え直します。

指導保育教諭の講評・助言等

ドキュメンテーションとてもわかりやすく、おもしろいです！子どもたちの遊びの発展もとてもわかりやすく書いていますね！**部分実習**での嬉しいこと、とても私も嬉しくなりました！子どもたちはプラスな所も、反省すべき所も、いつもたくさんのことを教えてくれます。それは集まりでも、遊びでも、一人ひとりの関係作りの中でもそうです。全部がうまくいくことはなかなかありません。しかし、今日があつての次です。感じたこと、見つけたことを次に活かしていきましょう。

～ドキュメンテーション日誌のメリット～

ドキュメンテーション記録は、子どもの理解、保育の過程を記録する1つの有効な方法となります。

また、ドキュメンテーションを利用して子どもたちの姿や、どんなところが成長しているかを実習生と保育者等が共有することで、保育士等のモチベーションと保育の質の向上にもつながります。

実習生から～ドキュメンテーション日誌に対する感想～

- ・写真と一緒に記録することで何を残すか考えるのが楽しかった。
- ・どうしたら保育の面白さが伝わるかを考え、工夫することが楽しかった。
- ・ドキュメンテーションの取り組みだったため、日誌を書くのが苦ではなく楽しかった。
- ・日誌に子どもの遊びや自分の気づきを記録として書き残すことが大切だと思った。
- ・ドキュメンテーションによる記録だったため、実習後、日誌を見返したいという思いになり、具体的な状況を思い出すことができた。

ドキュメンテーション日誌でみえる実習生の学び

- ・ドキュメンテーション日誌に取り組むために、実習生が写真を撮ることは、これまで以上に子どもの遊びに興味を持つことにつながります。

ドキュメンテーション日誌の注意事項

- ・写真には、個人情報が多く含まれているため、まず園として、保護者の承諾を得ておくこと。
- ・保護者から写真を撮影しても良いという承諾があった場合でも、写真の内容によって、使ってほしくないという申し出もあることに留意すること。
- ・写真撮影に際しては、プールでの着替えの様子やおむつ替えなどの場面で、子どもの写真を撮ることは控えること。
- ・撮影した写真は、実習日誌だけで使い、園内の所定の場所に保管すること。決して、園外に持ち出したり、SNSなどで使用したりしないこと。撮影したデータは必ず廃棄すること。



(4) 指導実習（部分・責任実習）

指導実習とは、実習生が保育を計画し、準備、実践する体験をいいます。短時間の保育を行う場合を部分実習、半日または1日の保育を行う場合を責任実習と呼ばれています。

子どもとの多様な関わりを通して子どもを理解し、その理解に基づいた計画の立案、実践、評価・反省、改善といった「保育の過程を体験する」ことが大切です。

① 部分実習

- ・初めての部分実習については、計画を立てるところから丁寧に指導し、実習生の希望を尊重し、子どもの年齢や発達に配慮して指導を行いましょう。
- ・部分実習については、子どもの実態を踏まえた計画を立て、実施することが必要です。実習生の動きや子どものかかわりを見て、実習生が立てた計画のどの部分をどのように修正したらよいかを実習生と一緒に、話し合いながら進めていきましょう。
- ・部分実習の過程で子どもの姿を通して現場の保育者と実習生との関係を深めていきましょう。
- ・部分実習に関するエピソードに対して、保育者から「この姿にどんな環境や遊びが考えられるかな」等と問いかけて、実習生に保育の計画やその展開を考える機会を作りましょう。
- ・部分実習の振り返り際には、肯定的に伝えることを基本とし、明らかになった課題を確認しましょう。

※ P. 7、15～16にて部分実習の実習事例を掲載しています。

◆養成校での指導～実習指導（部分実習）～◆

- ・部分実習の計画作成は、保育者に事前に相談し、子どもの実態に合わせて行うようにする。デイリープログラムや子どもの日常の生活に配慮した部分実習となるよう指導している。
- ・実施に当たっては、計画にとらわれ過ぎず、柔軟に取り組むよう指導している。

② 責任実習

- ・子どもの実態や保育の過程を尊重した責任実習となるよう、指導案の作成にあたっては丁寧に指導しましょう。
- ・実習生が立てた指導案を大切にしながら、年齢や発達に合わせた指導案にするよう指導しましょう。
- ・指導案作成時、色々な場面の設定や子どもの姿が想像できるよう（予測できるよう）アドバイスしましょう。
- ・失敗を恐れず、たとえ責任実習で失敗したとしても、今後の保育に活かしていければよいことも伝えましょう。

◆養成校での指導等～実習指導（責任実習）～◆

（事前）

- ・ 責任実習の計画作成はできるだけ早く保育者の指導を受け、必要に応じて修正する。
- ・ 子どもの興味や関心など、子どもの状況に合わせて指導案を作成する。
- ・ 責任実習に必要な準備（必要な道具、材料等）をする。

（実習期間中）

- ・ 実習巡回時に実習生の困っていること、相談したいことを確認し、実習生へ指導した内容を園に伝達している。

（実習終了後）

- ・ 実習指導者等から指導や助言を受けたことを謙虚に受け止め、実習記録等から自らの実習を振り返り、新たな課題を見出していくことを事後指導等で指導している。
- ・ 振り返ったことを次の実習へ活かすよう指導している。

（5）保護者支援

保護者支援は、送迎時の保護者と保育者の関わりを実習生が見ることができるよう工夫したり、説明したりすることが、指導の基本となります。

実習生を養成校から受け入れていることを保護者に事前に伝えましょう。

また、実習期間中に保護者が参加する行事等が行われる場合には、観察することや意図や工夫などを説明しましょう。

○オリエンテーション時に行うこと

- ・ 園で行っている「保護者支援」について、記録物を提示する等、園の保護者への多様な対応について、実習生に説明しましょう。
- ・ 個人情報には配慮しつつ、家庭環境や保護者の育て方が子どもの育ちに影響することを説明しましょう。
- ・ 実習生が保護者から声をかけられた場合には、必ず保育者等に連絡することを事前に伝えておきましょう。

○こんな工夫、あんな工夫

- ・ 保護者支援の例を、例えば「子どもに泣かれると困って動けなくなってしまう保護者には、すぐにその場に保育者が行き、子どもに声をかけながら対応する」など具体的に伝えましょう。
- ・ 配慮が必要な子どもの家庭には、関係機関（行政等）への橋渡しをすることや、必要に応じて面談することなど、日常の保育の中で行なっている保護者支援について話をしましょう。



3) 実習の振り返り・評価

(1) 振り返り

実習中の振り返りは、次のポイントで実施すると効果的です。

- ・日々の振り返り（午睡の時間、夕方の時間等を活用）
→養成校で学んだ知識や技術と保育現場の実態の違いを丁寧に説明しましょう。
- ・中間での振り返り（2週間の実習期間であれば、7日目等）
→中間での振り返りでは、それまでの経験や学びを後半の実習にどのように活かしていくかを明確にしましょう。
- ・最終日の振り返り
→最終日には全日程を通しての経験や学びを活かし、次の実習等に意欲を持って取り組めるよう配慮しましょう。

振り返りは、実習中の出来事を振り返り、学びを整理し、疑問の解消、課題の明確化につながる大切な時間です。

その際には、実習生が主体的に話すことができるよう配慮しましょう。

(2) 評価

評価で大切なことは、実習生が「心動かされたこと」、「楽しかったこと」、「努力・工夫したこと」、「気づきや学びを明確にすること」です。実習生の良さを認めたくえて、課題を明確にしましょう。

① 実習生による自己評価

(実習中)

- ・日々の実習に基づく自己評価
- ・中間の振り返りを活かした自己評価
- ・実習最終日に行われる振り返りを活かした自己評価

(実習後)

- ・養成校における事後指導
- ・実習評価票による自己評価
- ・実習を振り返り、実習の学びと成果をまとめ、学生間で発表し合う
- ・指導教員との面談

② 実習園による評価

養成校の実習評価票等に基づき、評価を行います。その際、実習生は未来の保育を担う存在であることを認識して評価しましょう。

実習評価は実習指導者一人だけでなく、関係する保育者等の話し合いをもとに行いましょう。今後の課題の設定や学びについての記載も大切です。

③ 養成校による評価

実習の事前事後指導の評価と実習中の評価を行います。「もっと保育を学ぼう」、「保育者になりたい」という保育に関する学びへの意欲を高めることにつながる評価が求められます。

Ⅱ 実習事例から保育指導の方法を学ぶ

1) 実習を通して実習生が変容した事例

◎緊張して何もできなかったが、、、

1回目の実習では、とにかく緊張をされていて何もできませんでした。自分でもわかっていましたが、改善することが出来ませんでした。1回目の実習の振り返りの際、保育者から「自分からもっと質問をしても良いと思います。」と、アドバイスをもらいました。自分でも感じていたことだったので、“やっぱりな”という気持ちと、“悔しい”という気持ちが残りました。



そこで、私は、2回目の実習では、“とにかく自分から質問をしよう”、“分からないことは、必ず質問をする”という目標を立てました。実際に、2回目の実習では、とにかく質問をしました。質問を繰り返すうちに質問するタイミングや、保育者がどんな気持ちで保育をしているのかを学ぶことが出来ました。質問ができる自分自身に気付いた時、「なんか、私、成長したな」と自覚することが出来ました。

📌 ポイント 📌

実習中のアドバイスは、日々の振り返り、中間の振り返り、最終日の振り返りで行うことが効果的です！



◎絵本の読み聞かせに苦戦をして、、、

私は1回目の実習と2回目の実習で、絵本の読み聞かせをしました。

1回目の実習では、絵本を読むことに精一杯でした。子どもをとにかく静かにさせようと必死になり、子どもの言葉に耳を傾けられず、絵本を読んでいる間も子どもと対話をすることもできませんでした。悔しい気持ちが残りました。



2回目の実習では、保育者たちが絵本を読む様子を観察しました。1回目の実習で絵本の読み聞かせの指導実習でやり残した感じを持っていたため、2回目の実習では、私からお願いをして指導実習を行いました。指導案も1回目より詳しく書きました。今度は気持ちにゆとりをもって実施することが出来ました。子どもたちの表情や言葉にも耳を傾けることが出来き、同じ内容の指導実習を経験したことで、自分自身の変化に気付くことが出来ました。

📌 ポイント 📌

実習生が1回目の経験を活かし、2回目の実習で、自ら指導実習の内容について園に依頼したことに注目したい事例です。

◎保育者からのアドバイスを受けて、、、

1回目の実習では、“子どもに言葉をかけなくては”と、一生懸命になりすぎて、ずっと言葉をかけていました。反省会で「言葉のかけすぎは、子どもの考える力や集中する力を奪ってしまうこともあるので、必要な時にわかりやすく伝えれば大丈夫よ」と、アドバイスを頂きました。1回目の実習中は、なかなかうまく実践できませんでした。



2回目の実習では、1回目のアドバイスを活かしたいと考えていました。そこで自分の言葉に気をつけて実習を行いました。そうすると、子どもは自分たちで考えていろいろなことができることに気付きました。1回目の実習での保育者のアドバイスのおかげで、私自身が気づいたことを保育に活かすことができたのだと思います。ちょっとだけ、自分が先生に近づけた気持ちになりました。

📌 ポイント 📌

1回目の保育者のアドバイスが、実習生自身の気づきにつながった事例です。

2) 日誌に実習生の成長がうかがえる事例

～日誌を実習指導者が添削することにより、次第に日誌が書けるようになった～

保育実習Iの1年生の日誌です。コツコツ勉学に励んでいる実習生ですが、自分から積極的に行動することが苦手とすることがあって、何を具体的に書いたらよいか悩む様子でした。新型コロナの影響で3月に実習が延び、3月7日から実習が開始されました。

① 2日目の日誌

日誌のどの項目についても記述は少なかった。「子どもの活動」の欄では、「自由遊び」とだけ書いてある部分について、保育者より下記のようなコメントがありました。

自由遊びについて、「この時間は子どもたちがどんなことをして遊んでいましたか」、「自由に遊んでいる時の子どもの様子」、「子どもと保育者の関わり、どんな遊び・動きをしていてどんな声かけがあったかなど書いてみて下さい」とあった。

この後、実習生は自由遊びについては、いくつかの遊びを取り上げて、遊びの内容を書くようになりました。

📌 ポイント 📌

養成校でも事前を書く内容等は指導していますが、1回目の実習で、実習日誌に遊びの内容や展開を書くことは実習生にとって難しいです。「子どもの活動」の部分で、実習指導者が目に見えて分かる活動を書くように促している指導は適切です。

② 7日目の日誌

実習生の日誌の記述量が増え、これまでの指導・添削していただいた内容が反映されていました。「実習生の関わり」では、読み聞かせの際、自ら環境設定する状況が書かれています。実習指導者は、実習生の課題「子どもたち全員が楽しめるように絵本を読む」について、「その心がけがとても素敵です。」とコメントしました。

📌 ポイント 📌

実習生の書いたことに対し、実習指導者が「素敵」・「嬉しい」等、共感し褒めることは、実習生もそのコメントを嬉しく思い、「子どもの行動をもっとしっかり見よう」、「子どもとの関わりをもっとしっかりしよう」と思うことにつながります。

3) 子どもの気持ちに寄り添いながら実習生が育つ事例

保育実習Ⅰで、1歳児クラスの部分実習を行った実習生のエピソードです。

給食前の時間に『こぐまちゃんのホットケーキ』と『きんぎょがにげた』の絵本2冊を読みました。2冊目の『きんぎょがにげた』を読み終わった後に、「きんぎょさんどこにいるかな?」と、予め保育室に貼ったきんぎょを見つけられるように子ども達に呼びかけました。保育室に貼ってあるきんぎょを見つけた子ども達は「いた!」と見つけたことを喜んでいました。実習生はそんな子ども達一人ひとりに、用意していたきんぎょを渡しました。

そして、「きんぎょさんが手を洗って給食を食べようって言ってるよ。きんぎょさんと一緒に給食を食べに行こう。」と子ども達を給食に誘いました。実習生の話を聞いて、Sちゃん以外の子ども達は手を洗いに行きました。

実習生は、手を洗いに行かずに牛乳パックの台で遊び始めたSちゃんの側につききました。

Sちゃんに何と声をかけたらいいのか分からずに悩みながら、そっと側にいました。Sちゃんが何をしたいと思っているのかを考えながら、見ていました。

でも、他のクラスの子も達と保育者は手を洗って給食スペースに移動していたので、Sちゃんを給食スペースに連れて行かなくては、と思いました。



そこで、「Sちゃんも手を洗いに行こう。」と誘いました。

それでも、Sちゃんは遊び続けています。

どんどん、クラスの子も達は給食スペースに行き、給食を食べる準備をしていました。

Sちゃんに何度か声をかけますが、Sちゃんは動こうとしませんでした。



さっき渡したきんぎょを使って「きんぎょさんと一緒に行こう」ときんぎょを動かしながら、手を洗いに誘いました。でもSちゃんは少し怒ったように実習生の手からきんぎょを取り返して、再び遊び始めました。



実習生は、いくら誘っても手を洗いに行こうとしないSちゃんを抱っこして連れて行こうとしました。でもSちゃんは全身で抵抗しました。実習生はSちゃんの抵抗を受けて、無理矢理に連れて行くことはしませんでした。



実習生は、以前夕方にSちゃんと牛乳パックの台を使って椅子作りをしたことを思い出していました。

“もしかしてSちゃんは、前回みたいに椅子を作りたいと思っているのかもしれない”と考えた実習生は、「こお?」とSちゃんに台の置き方を聞いてみました。すると、“うん、うん”と言うように頷くSちゃん。

そこから、1つ1つSちゃんに聞きながら台を置いていきました。

すると、Sちゃんが実習生に“あなたもここに座って”と言うように台を手で叩きました。

実習生もそれに応えるように台の上に座ると、Sちゃんは満足そうな表情を見せていました。

Sちゃんに聞きながら、とうとう椅子が完成しました。

完成した椅子に座るSちゃん。しっかりきんぎょも手に持って、とっても嬉しそうな満足そうな表情を見せてくれました。

その後、Sちゃんの椅子が壊れないようにテープで固定しました。すると、実習生と一緒に手を洗って給食に向かって行きました。



実習園の園長先生から実習生へのコメント

Sちゃんのエピソードでは、実習生がSちゃんの気持ちを汲んだことによってSちゃん自身が椅子を作り、満足して給食に向かう姿がありましたが、Sちゃんの気持ちが分からなかったり、尊重できなかったり、実習生自身が困ってしまうこともたくさんあると思います。実習は、実践の場だからこそ、また、子どもと直接関わる場だからこそ、感じられることがたくさんあります。実習生自身が心を動かした経験をぜひ、実習指導者に話してみてください。

子どもの姿、実習生が感じたことを保育者に話してくれることで、保育者自身もその子どものことについて考える機会になります。振り返りの中で気付いたことを保育に活かす、という循環が保育の質を高めることにもつながります。

実習生だからといって遠慮することなく、自分自身が感じたことを話すことによって少しでも多くの学びを得たり、深めたりしてほしいと思います。

Ⅲ 実習生を受け入れて～実習指導者・園のメリット～

保育者にとっての実習指導の意味

～保育の振り返り・評価・保育者の専門性の向上につながる～

保育所等組織にとっての実習指導の意味

～組織の連携体制づくり・次世代の育成・保育の質の向上～

○ 実習生を受け入れることで、改めて実習指導者自らの保育を振り返り、保育の評価・改善につながります。また、保育理念や保育の方法等を考える機会にもなり、保育の質の向上にもつながります。

実習生と保育を語り合うことで、保育者が初心にかえり、「こんな考え方、捉え方があるんだ。」というような新鮮な気持ちになります。

○ 実習指導者と実習生との同僚性を尊重した関係性は、現場の保育者同士の関係性づくりに共通することに気づかされます。

“子どもの姿を語る”、“子どもの姿から考える”ことをベースにした職場づくりを実践することにもつながります。

○ 実習生が「保育は楽しい」と思える実習は、「もっと保育を学ぼう」、「保育者になろう」とする意欲を高めることになり、人材育成・人材確保につながります。



おわりに

本誌を閉じるにあたって、「実習生と実習指導者が共に育ち合う保育実習」に向けて、実習指導者として心にとどめておきたいことを、具体的な事例を通して、確認しておきましょう。

A実習生は、5日目の振り返りの時間、「aちゃんが、大好きなくまのぬいぐるみを抱っこして、『おさんぽ、うれしいね、うれしいね』と話しかけながら、積み木の家を出ていきました。廊下に置いてあるベンチに、くまのぬいぐるみと一緒に座ろうとしたとき、『bちゃんも、くまん抱っこする？』と、じっと見つめているbちゃんに気づいたaちゃんが、自分から声をかけている姿にうれしくなりました。」と、実習指導保育者に語っています。さらに、「日誌にも書いたのですが、実習1日目、砂場でbちゃんが何度も『シャベル、かーして』といっても、『だめ』と言いつづけたaちゃんの姿と保育者のかかわり・・・、子どもたちは育ち合っているのですね。」と目を輝かせ、語っています。

緊張感をもってスタートした実習生が、保育者の温かな見守りの中で、子どもの姿、子どもの心の動き、さらには保育者の援助について、自分の思いを率直に、楽しげに語っています。

さて、実習での体験は、一日の大半を園で過ごす子どもと、保育者等多様な人々とが紡ぎだす生活を共にしながら、子どもとその背景にある保護者理解、保育理解を深め、専門職としての基盤を育むことにつながります。

保育に携わる保育者等に最も基本的なこととして求められる、「倫理性」について述べておきたいと思います。子ども一人ひとりを、かけがえのない存在として、子どもを権利の主体者として認めることが基本です。

保育士の国家資格化を前に、「全国保育士倫理綱領」が策定され、平成15年3月、全国保育士会及び全国保育協議会で採択され、専門職としての行動規範を明らかにしました。

保育実習への取り組みに際して、実習生、そして保育実習指導者、園の全ての職員が、「倫理綱領」を改めて認識することが求められます。

全国保育士会倫理綱領

すべての子どもは、豊かな愛情のなかで心身ともに健やかに育てられ、自ら伸びていく無限の可能性を持っています。

私たちは、子どもが現在(いま)を幸せに生活し、未来(あす)を生きる力を育てる保育の仕事に誇りと責任をもって、自らの人間性と専門性の向上に努め、一人ひとりの子どもを心から尊重し、次のことを行います。

私たちは、子どもの育ちを支えます。

私たちは、保護者の子育てを支えます。

私たちは、子どもと子育てにやさしい社会をつくります。

以降 略

保育実習指導に係る検討会

(委員 五十音順)

コーディネーター	増田 まゆみ	湘南ケアアンドエデュケーション研究所 所長
委員	伊澤 昭治	社会福祉法人湘南杉の子福祉会 五反田保育園 園長
委員	齊藤 靖恵	金沢区こども家庭支援課 横浜市金沢さくら保育園 副園長
委員	富田 弘美	社会福祉法人つきかけ会 岩瀬保育園 主任
委員	福田 真奈	関東学院大学 教育学部 こども発達学科 准教授
委員	寶川 雅子	鎌倉女子大学短期大学部 初等教育学科 准教授
委員	宮川 萬寿美	小田原短期大学 保育学科 特任教授
委員	渡邊 英則	学校法人渡辺学園 ゆうゆうのもり幼保育園 理事長・園長



【発行】神奈川県福祉子どもみらい局子どもみらい部次世代育成課

〒231-8588 横浜市中区日本大通1 TEL:045-210-4687 FAX:045-210-8956

令和5年3月発行